



Title	追悼：蟻田功さん「WHO栄光の時代を駆け抜けた先達」
Author(s)	中村, 安秀
Citation	目で見えるWHO. 2023, 86, p. 30-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93474
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

追悼：蟻田功さん 「WHO栄光の時代を駆け抜けた先達」

蟻田功さんが2023年3月17日、熊本市内の高齢者施設にて老衰のため亡くなられた。讀賣新聞熊本支局の岡林嵩介記者によると、新型コロナウイルス感染症のパンデミック時には、患者を隔離する重要性を職員に説いていたという。天然痘撲滅の最前線に立って奮闘した経験をもつ先達の意見に耳を傾ける機会をもつことができなかったことが悔やまれてならない。

寄稿 中村安秀（公益社団法人日本WHO協会理事長）

私が、はじめて蟻田功さんにお目にかかったのは1991年であった。湾岸戦争の直後、世界保健機関（WHO）が主導するクウェート保健医療救援復興調査団にWHO短期コンサルタントとして参加させていただいた。調査団長はWHOのダニエル・タラントラさん（のちにハーバード大学公衆衛生大学院講師）。彼が天然痘根絶本部の上司だった蟻田功さんを招聘し、シリアの地域保健局長経験者などを加え、感染症対策のフィールド経験豊かなチーム・アリタができあがっていた。

1991年1月にイラクのフセイン大統領によるクウェート侵攻に対し、多国籍軍による空爆が始まり、イラク軍が敗走したのが「湾岸戦争」である。私たちは、3月下旬に国連特別機にてバーレーンから空路クウェート入りした（写真1）。街には戦禍の傷痕が残り、どこにでも地雷の可能性があるのでの調査となった。宿泊できる場所が限られていたので、滞在期間中は、ずっと蟻田さんとホテルで同室であった。朝食から就寝まで、文字通り調査団の全行程に同行してご指導いただいた。

調査団の仕事が佳境に入ったとき、蟻田さんは、半日部屋にこもって報告書のドラフトを書き、私がそれをタイプ打ちし、チーム全員で手を入れて報告書を完成させた。

「フィールド調査をした時は、その時、その場所で報告書を仕上げるのが鉄則。その機会を逃したら、同じメンバーで深い議論するチャンスは二度とやってこない。」

蟻田 功（ありたいさお）さん略歴

1926年熊本市生まれ。熊本医科大（現熊本大医学部）を卒業後、50年に旧厚生省に医系技官として入省。1962年からWHOスタッフとして、リベリアにおける天然痘対策に携わった。64年からWHO本部（ジュネーブ）勤務。66年のWHO総会でWHO天然痘根絶対策予算が可決され、以後、天然痘対策本部の一員として、世界各国の天然痘対策を指導する。77年から二代目のWHO天然痘根絶対策本部長を務め、2年間にわたる天然痘根絶確認委員会の作業を見守り、80年の「天然痘根絶宣言」に繋げた。

帰国後、旧国立熊本病院（現国立病院機構熊本医療センター）の院長に就任し（1985年—1991年）、当時全国で唯一の国際協力基幹施設として国際保健医療協力を積極的に取り組んだ。1991年に、細川護熙熊本県知事（当時）の構想による、地域医師会が主導した財団法人国際保健医療交流センター（熊本市）理事長に就任。保健医療分野における国際協力事業に果敢に取り組み、国際協力機構（JICA）研修やポリオ根絶計画などに関与した。

1980年、第51回朝日賞受賞（受賞理由は「天然痘の根絶に尽くした功績」）。

1988年、日本国際賞（Japan Prize）を受賞。受賞理由は「天然痘の根絶」。共同受賞者は、ドナルド・A・ヘンダーソン博士（米国：当時ジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生学部長）（1928-2016）とフランク・フェナー博士（オーストラリア：当時オーストラリア国立大学名誉教授）（1914-2010）であった。

2023年3月17日、熊本市内の高齢者施設にて老衰のため死去（96歳）。

天然痘対策のフィールド調査を各国で積み重ねてきた蟻田さんからさまざまなことを教えられた。チーム・アリタは全員が天然痘対策の経験をもち、食事時の合間には、インド、バングラデシュ、エチオピアなどにおける武勇伝を聞かせていただいた。ちょうど、パキスタンで国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の1年間の勤務を終えたばかりの私にとって、最高にぜいたくなOJT（On the Job Training）であった。

蟻田さんは、天然痘根絶の教訓として、「人類は、宗教、政治、人種のワクを越えて、協力することができる」、「予防医学は、治療医学よりも、費用効果が高い」という2つのことを挙げていた（1993. 雑誌『ウイルス』）。

天然痘は、人類が明確な戦略をもち、根絶できた唯一の感染症である。天然痘ウイルスは、ヒト以外に感染しないうえに、不顕性感染（無症状感染者）がほとんどないといった根絶に有利な特徴を有

表 世界天然痘根絶年表

西暦	主な出来事
1796	英国の医師ジェンナーが牛痘による天然痘予防法を実施した
1958	WHO 総会で地球規模の天然痘根絶計画が提案される
1965	二又針（にさしん：the bifurcated needle）が発明される
1966	WHO 天然痘根絶本部（初代本部長は D.A.ヘンダーソン氏）が設置される
1971	ラテンアメリカで根絶成功
1972	インドネシアで根絶成功
1975	インドで根絶成功
1977	蟻田功氏が、第2代天然痘根絶本部長となる
1977	10月 ソマリアで最後の患者
1978	天然痘根絶確認委員会が設置される
1980	WHO 総会で天然痘の根絶が宣言された

蟻田 功『地球上から天然痘が消えた日』を改変

していたことがあげられる。それだけではなく、多くの人たちの献身的な努力とともにさまざまな幸運が重なり合った、WHO の栄光の時代の偉業だった（表）。

最初の幸運は、1965 年に米国のワイエス研究所でベンジャミン・ルビンさんにより二又針が開発されたことであった。接種方法が簡単でふつうの人に 10 分間で教えることができ、ワクチン接種量は従来の 4 分の 1 で十分な効果が得られた。いままジュネーブの WHO 本部には、二又針で天然痘ワクチン（種痘）を接種する銅像が置かれている（写真 2）。

次の幸運は、1966 年 WHO 総会において天然痘根絶特別予算が採択されたときにわずか 2 票差であったことだ。すでに天然痘の患者がいなかった先進諸国を中心に、天然痘対策に多くの予算を割り当てることに対する懐疑的な意見が少なくなかったという。いまになって絶賛されている天然痘根絶事業が、決して大多数の賛成を得て始まったのではないことは明記しておきたい。

当初は、全員にワクチン接種することによる集団免疫の獲得を目指していたが、現実に 100%の接種は不可能であった。

そこで、「患者発見・封じ込め作戦」を採用した。保健スタッフが村々を回り、天然痘患者の写真をもって患者を探す。発見された患者は直ちに隔離され、その家族やコミュニティ全体に対して二又針で天然痘ワクチンを接種する。この封じ込め作戦が功を奏し、インドネシア、インドなどで次々と天然痘の根絶に成功した。

対策が遅れていたエチオピアでは各国の国際協調が行われた。WHO チーム 2 名に、十数名のエチオピア人スタッフ、米国の平和部隊、日本の青年海外協力隊、オーストラリアなどが協力して、辺境地帯での対策に従事した。内戦や紛争のなかで、ときにはゲリラ部隊と遭遇し協力を取り付けながらの業務だったという。

「国際協力では、正しいと信じることは、きちんとと言わなければなりません。まわりを見まわして、ひとがどう思うかを考えていると、仕事はできません。また、尊敬もされないのです。」（1991.『地球上から天然痘が消えた日』あすなろ書房）

自分の信念を貫き通し、世界的な偉業に邁進し、各国の政府高官やスタッフから信頼され、WHO の仲間から尊敬された真の国際人であった蟻田功さんの冥福を心からお祈り申し上げます。



写真1 湾岸戦争直後のクウェート空港に降り立った。右側が蟻田功先生、左のサングラス姿が筆者(1991年3月)



写真2 天然痘対策として、二又針で天然痘ワクチンを接種する銅像。二又針は、長さ約5cmの細い銅鉄製の棒で、一端に2つの突起があり、この突起の間に天然痘ワクチン1回分を保持するように設計されている。(WHO・ジュネーブ)